

皮膚科医15年

—変化し続けるワークライフバランス—

柴田 彩

東京大学医学部皮膚科講師

今回のエッセイの執筆のお話をいただいたとき「女性医師のワークライフバランスの選択はさまざまで答えはないのに、書いてしまうと押し付けがましくなるのではないか？」という思いがあり、なかなか筆が進まなかった。ただ、そう思うこと自体が自意識過剰だと思えば、気が楽になった。エッセイなど書いたこともなく、拙い文章なので、読み流していただけるとありがたい。

私自身はといえば、第一子出産は大学院時代であったが、当時は暗黙の了解で育休取得はなく、必死の思いで子どもを保育園に何とか入れて復職した。大学院時代は研究、臨床、育児と必死だった覚えがあるが、逆に選択肢がなかったから、迷うことなく突き進んでいた。

大学院卒業後は留学を希望していたものの、家族と同じタイミングでの留学を前提としており、なかなかそのチャンスは来なかった。やはり時間に追われつつであったが、常勤医として臨床をメインに過ごした。

同期の留学を見送り、気づけば帰国も迎え、あっという間に卒後4年が過ぎたころ、ようやく留学することができた。留学中は臨床の負担が減った分、研究と家庭育児の割合が増え、じっくりと物事に取り組む時間ができ、たいへん充実していた。また、留学中は研究職になるので、子どもが熱を出したときは自宅で子どもと過ごすことができ、母親として素直に嬉しかったことも覚えている。とはいえ、帰国の期限があるからこそ貴重な留学生活であり、帰国まで半年を切ったころは留学中の仕事を終えられるか危うくなってきた。ここで頑張らなければ後悔する、仕事を形に残したいという強い思いに駆られ、研究室の



ボスとの日々の議論を含め、研究のアクセルを踏み続けた時期があった。

現在は医局長としての業務が主であり、いままでになく、学ぶことの多い日々を過ごしている。

このように、自分の中でのワークライフバランスは自分の立場が変わるとともに変化してきている。使命感に駆られることもあれば、疲れることもあるし、ワークライフバランスで悩むこともある。ただ、自分の中でやはり臨床も研究も含め、仕事が好きで、離れたくはないという思いがある。迷ったときは思い切って前に進んだほうが道は拓け、次につながる人が多いと信じている。

ワークライフバランスについて書くことに迷いを感じた理由として、自身が医局長として、若手医師の面談を担当するようになったことも大きい。男女にかかわらずさまざまな背景をもった先生が入局してくるが、医局として可能なかぎりサポートをしたいと思う一方、最終判断を下すのは各医師個人になる。人生の岐路において後悔のないよう、皮膚科医としてのプライドをもって、最良の選択をして欲しいと常に思っている。私自身は、まわりへの感謝の気持ちをいつも忘れずに、これからも仕事を続けていきたい。